North and South: ヒロインは眠らない

木　村　正　子

I　はじめに

North and South（1854）において特徴的なのは、中流階級のヒロインMargaret Haleが経済的な自立を得る点である。これは他のElizabeth Gaskellの長編小説の中でも類を見ない。*Mary Barton*（1848）を始めとしてGaskellの小説では、お金はあるが退屈を持て余す中流階級の女性よりも、貧しさの中でコミュニティーの団結を図る労働者階級の女性たちに、作者の共感が向けられてきた。スノビズムや拝金主義に対する一種の嫌悪感が、中流階級の人々の偽善的な言動や行動の描写に投影されており、例えば*Mary Barton*のCarson家や*Ruth*（1853）のBradshaw家はその代表格と言えるだろう。だが、Gaskellはそうした中流階級の人々を揶揄しながらも、階級差の存在自体を否定することはない。むしろ、中流階級に対する不満に駆り立てられて衝動的に現状を打破しようと試みる労働者たちを罰するプロットを準備する。殺人を犯したJohn Bartonや町の女に転落したEstherがコミュニティーを追われるのはそのためである。

しかし*North and South*でのGaskellは、これまでとは違った方向性を持つ物語の構築を試みている。それは、中流階級のヒロインが私有財産と家庭外にも活動の場を得るという、一種の伝統破りを可能にする物語である。ヒロインの成長物語という視点でとらえるのであれば、失敗を経験しながら精神的な成長を遂げて、最後には愛する男性との結婚が待つという、ロマンスのお決まりパターンをMargaretも踏襲する。ところが、Margaretの失敗は、Jane Austenのヒロインたちのように経験不足からくる未熟さ、あるいはMary Bartonのように安楽な生活獲得のための打算から生じるのではない。確かにMargaretの未熟さは否定できないが、むしろ場所の違いによる流儀の違いに起因する場合が多い。Margaretの成長は彼女の個人的な恋愛問題のみならず、彼女を取り巻く社会的

な問題をも含めて考える必要があり、自ずと本作品の関心が、個人的な領域（the private）と公的な領域（the public）との分断が困難である点に向けられるわけである。

本論では、*North and South* がロマンスの常套手段である「ハッピー・エンディング」の形を取りながらも、その背後に伝統を覆すような物語を構築する Gaskell の作戦を検証していく。タイトルにある「ヒロインは眠らない」というのは、ヒロインを公の場での物語にも積極的に参加させていくこと、すなわち常に作品の前景にヒロインが存在するという意味で用いる。これは、Mary Barton が重大な場面で失神したり、人事不省の病にかかるなど、最後まで「保護される対象」として、家庭内にしか活動の場を与えられない状況と対比させるためである。両ヒロインの違いが単に性格づけの違いだけでなく、物語の中での配置の違いにも深く関わることに注目すれば、ロマンスの背後にある女性の役割について新しい解釈が可能ではないだろうか。

II

Margaret の変化を端的に表現すれば、仲介役から主体性を持った人物への成長である。その変化を論じるにあたり、作品の冒頭と結末の場面を比較すれば、最も対照的な Margaret の姿をとらえることができるだろう。二つの場面が実は同じ場所、London の Mrs. Shaw 宅の居間に設定されている点は効果的である。冒頭での Margaret は、従姉 Edith の代わりにショールを羽織る "shawl-bearer" (10) として登場する。Mrs. Shaw の訪問客は結婚を控えた Edith の婚礼道具を見に来ており、インディアンショールに代表される豪奢な衣装は Shaw 家の地位と富を誇示するのに十分である。だが、装飾品がその所有者の価値を引き上げる一方で、所有者自身の存在は全く切り捨てられている。客人たちは、ショールを羽織る Margaret が完全にその一部と化し、本来この役目を担うはずの Edith が不在なのを気にかけてもいない。実際、Edith は語り手が "the Sleeping Beauty" (10) と形容するように、奥の部屋でうたた寝をしている。しかし、彼女の代理でショールを持って立つ Margaret もまた象徴的には「眠っている」と言えるのではないか。それは、Margaret も Edith も中流階級の女性

の典型らしく、外見的な美のみで対価価値が引き上げるのを待つばかりで、自分の言葉での自己主張は許されないからである。しかも、外見的な美がその人の価値を引き上げたところで、財産がなければ女性の価値は一瞬の内に失墜する。Margaret が「レディ」としての威信が保てるのは、牧師の娘という肩書きと、Mrs. Shaw の後ろ盾があればこそ。それらをなくした Margaret が受ける評価は、Mrs. Thornton が息子に忠告するこの一言、"Take care you don't get caught by a penniless girl, John." (77) に集約されている。

一方、結末の居間での Margaret は、工場主 John Thornton を前にして商談を持ちかける。Margaret は、Mr. Bell から引き継いだ遺産を Thornton の工場の運営資金に提供しようというのだから、二人を結びつけるのは貸借関係、すなわち資本主義の論理である利潤追求を基底とした関係である。Margaret 自身、"the principal advantage would be on her side" (435) を前置きにしていることからも明らかだ。しかし、本心ではかつて求婚を拒絶した Thornton の好意をもう一度得たいわけだから、Margaret の申し出は、ビジネスと恋愛の二つの側面にわたる駆け引きということになろう。"Shawl-bearer" に甘んじていた姿と比較すれば、この場での Margaret は、自らの意思を持ち、自己表現の手段を得た女性へと変化を遂げている。しかしこの変化は、装飾の一部から行動する人物に変貌したことだけを意味するのではない。Thornton に資金を提供して、なお彼に求婚のチャンスを与えようという態度は、工場主と労働者の関係について Thornton が突きつけた言葉、"We, the owners of capital, have a right to choose what we will do with it." (117) の再現とも言えるのだ。この時、Thornton は自分の工場の運営方針を労働者たちに諮る必要はないと言って、資本を持つ者の権利を主張したわけだが、経済不況で自己資金が枯渇した今となっては、その資本家の権利は、工場用地の所有者である Margaret に移転している。そのため彼は、経営と結婚の承諾の両方で、Margaret の決定に依存する形である。

この Margaret の成長に寄与するものとして三つの要因が考えられる。一つは、Margaret が「保護される立場」ではなく、彼女自身が「保護する」立場にあること。二つ目は、Mary Barton や Ruth とは異なり、Margaret は心の内にある激情 (passion) を抑制するのではなく、それを起動力にして自立への道を切り

開くこと。最後に、Margaret の意思を現実化するための資金として、Mr. Bell の遺産が運良く手に入ったことである。

まず、Margaret を取り囲む環境から見てみよう。ロマンス・プロットの伝統として、経験不足で未熟なヒロインと、彼女を愛し正しい方向に導く男性の存在は不可欠である。それに従えば、Margaret を導く存在としての Thornton という配置は当然のものであろう。しかし Thornton が "self-help" によって現在の地位と財産を築いたように、Margaret もまた精神面での "self-help" によって困難を切り抜けてきたのである。*North and South* は、Margaret がロンドンの Mrs. Shaw 宅で安穏と「眠っていた」状況を追うことはない。作品の始まりは、Edith の結婚を機に Margaret が実家の Helstone へ戻るところから。Helstone で待つのは父の国教会牧師の辞職とそれに伴う処理である。父の Mr. Hale は、物事の決定権は妻にも娘にも譲らないが、事後処理は一切娘に任せてしまう。本来この処理を行うはずの兄 Frederick が不在である以上、一家を精神面で支えるのは Margaret の役目になる。そこには「保護してもらう」立場に甘える余裕はない。むしろ、彼女が率先して家族を守るために行動しなくてはならない。

この Margaret の状況は、父が殺人を犯して逃亡、恋人の Jem が身代わりに逮捕された時の Mary Barton の状況と似ている。Mary は、父のことを伏せたまま、Jem の無実を晴らすための証人を探して Liverpool まで単身で出かける勇敢さを見せるが、法廷で Jem への愛を告白した途端に、病に倒れてしまう。このエピソードが意味するのは、Mary の役割が Jem の無実の証拠集めをするという「仲介役」に限定されているということ。Harry Carson 殺害事件の後始末をするのは無罪判決を得た Jem であって、Mary ではない。彼女はこの後、父が廃人同様になって帰宅するまで病の床に伏し、父の看病のために再び健康を取り戻す。Mary の強さは、恋愛に絡むこと以外は決して発揮されず、それに従う Mary の物語は、当時の社会の規範である男女の活動領域の境界線をきちんと守る代わりに、公の活動やそれに関する物語からは一切排除される。*Mary Barton* のプロットが公と個人の領域で二分される原因はここにある。

一方、Margaret はこの境界線を危うくする。Milton に来て以来、Margaret の関心は中流階級の女性たちの領域よりも男性の領域に向けられる。例えば Thornton 家のパーティで、もっぱら経済問題の談義に熱中する男性たちの会話

に気を取られている Margaret がそうだ。Milton の中流階級の女性たちは London の社交界の女性たちと同じく、Margaret には退屈な印象しか与えないが、Thornton を始めとする工場主たちの "the exultation in the sense of power of which these Milton men had" (163) は Margaret に目新しい魅力を感じさせる。Barbara Leah Harman が指摘するように、Margaret の関心が男性の領域に及ぶ時から、彼女の物語は男女の領域の分断を困難にするが、実は、Milton の町を歩くという行為そのものが、すでに中流階級の女性としては伝統破りなのである (Harman 364-5)。しかし、路上は Margaret と労働者の父娘 Nicholas and Bessy Higgins との出会いを導く。敵対する工場主と労働者双方との交流が可能なのは、Margaret がどちらの階級にも属しない「よそ者」だからであろう。しかし意識のレベルでは、Margaret の共感は労働者階級に向けられている。その理由として、Barbara Weiss は、Margaret が経済問題に関わることは、同時に彼女自身を含めた女性の生き方の問題に関わることだからと述べる。境界線を越えて新たな活動の場を求める姿勢は、労働者たちが工場主の一方的な搾取から脱却を求める姿勢の相似形だと言える (Weiss 284)。工場主たちは、労働者を "hands"、つまり「モノ」として扱っている。それをジェンダー問題に転換すれば、イデオロギーは女性を主体性のある存在ではなく、常に男性の保護あっての存在、男性に「見られる」存在として解釈する。

それでは実際、公の場に女性が参入することはどういうことなのだろうか。Harman によれば、ヴィクトリア朝のコンベンションとして、公の場は女性にとっては暴力を受ける危険性のある場所とされ、そこに参入する女性は堕落 (corruption) につながると見なされていた。既婚女性の財産所有、女性の就職、そして女性の選挙権は、女性は男性の保護下でこそ自由で安全であるとの大義名分のもとで却下されてきたのである (Harman 354-7)。このイデオロギーに従えば当然女性の領域は家庭に限定され、そこから逸脱する女性は非難の対象となるだろう。だが、Gaskell 自身も作家としてのアイデンティティを確立しようと思えば公の場で自分の作品を発表することになり、女性に割り当てられた領域から逸脱することになる。Gaskell は編集者の Charles Dickens と少なからず衝突を起こしたことが伝えられるが、それは、作家対編集者という立場上の衝突のみならず、男性主流の文壇に参入する女性作家に対する強い風当たりをも含む衝突

のようである。[1] *North and South* の暴動の場面では、Margaret が労働者たちから Thornton を守るために飛び出すが、その時の状況はまさに、コンベンション破りの女性に対する世間の非難を集約して見せてくれる。

暴徒の前に現れた Margaret に対し、Thornton は "This is no place for you." (179) と言う。ここでの "you" は Margaret 個人ではなく、女性一般のことであろう。工場主と労働者たちの闘争は男性の領域である。だが、"It is! ... You did not see what I saw." (179) と主張する Margaret は Thornton の言う "you" を彼女個人に宛てたものと解釈している。語り手が、"[If] she thought her sex would be a protection ... she was wrong." (179) というコメントを挿入するのは、もしも Margaret が一個人としてではなく、一人の女性として暴徒の前に立って効力を発揮すると考えるならそれは誤りであると断言するためである。Margaret は後に、"her reverenced helplessness" (195)、つまり保護すべき対象の女性の姿を盾にして Thornton を守ろうとしたと認めるが、「女性は弱い存在」であるという前提を利用して暴徒の前に立ち、「言葉」で説得しようとした点に彼女の誤算がある。労働者たちの目から見れば、気丈な Margaret の姿は侵入者のそれであり、逆に彼らの士気をいっそう煽る。そして、今度は労働者たちの側から、"This is no place for you." の叫びが投石となって Margaret を直撃するのだ。この点に関して Mary Elizabeth Hotz によれば、ヴィクトリア朝のジェンダー化された女性のイメージは、"women as victims, nearly lifeless, and passive" であり、暴動の現場に現れるような女性ではない。むしろ投石を受けて失神した Margaret の姿に初めて、「弱い女性」のコードを読み取り、彼らは正気に帰るのである (Hotz 178)。

それでは Gaskell の反応はどうだろう。コンベンション破りに挑戦した Gaskell であるが、投石を機に、負傷して失神した Margaret を Thornton が救うというロマンス・プロットに切り替える。Margaret の強さを前面に押し出しながら、クライマックスのところで反転させてしまうのは、Gaskell にも破れないジェンダーの壁があるとも考えられる。しかしここにはもう一つ潜在的な問題が隠されている。暴動の場に姿をさらした Margaret の態度は、当人にとっては "womanly instinct" (195) からくる行為のつもりでも、周囲の人々はそう解釈しない。Patricia Ingham は、Margaret の姿を "a public woman, an actress

not an angel, potentially a fallen woman" であると見なし、もし Margaret が "honest woman" としての面目を保つのであれば、Thornton との結婚はやむを得ないと主張する（Ingham xviii)。Gaskell の介入がなければ、この場面を機に労働問題はセクシュアリティーの問題へと転換を余儀なくされるだろう。ここで Margaret に象徴的であれ「転落の女性（a fallen woman)」の問題を突きつけることは、*Ruth* が追及する女性の貞潔（purity）の問題の再燃となりかねない。その意味では、唐突であっても、ジェンダー問題にすりかえることで、外観的には、倒れた女性を救う男性というロマンスの流れに乗ることができる。そして Margaret の内面に関して言うなら、Thornton の求婚をコンベンションの範囲でしかとらえない未熟な状態にとどまる彼女は、彼の「紳士的でない態度」に怒りを感じて彼を拒絶することで、Austen の *Pride and Prejudice*（1813）を思い起こさせるドラマ仕立てとして落ち着く。

つまり、公的な場に女性が出て行くことは、セクシュアリティーの問題が必然的に絡むということである。Mary Barton が "maidenly modesty"（153）のもとで謙虚な振る舞いを余儀なくされるには、彼女の物語からセクシュアリティーの問題を排除しようとする言説の干渉であろう。実際、Mary の魅力は工場主の跡取り息子 Harry Carson の目に止まり、彼の恋愛遊戯の対象になる危険性をすでに孕んでいたのである。そしてその罠に落ちた女性を描くのが *Ruth* であり、Gaskell のヒロインたちは当時の若い未婚女性たちへの警告の役割も担っているようだ。

しかし Margaret に関しては、Gaskell はさらなる挑戦を試みる。暴動の場面での行為は誤解を招く結果に終わったが、弱い者を助けるために行ったという Margaret の信念は揺るがない。彼女は、"All that yesterday, he might mistake. But that is his fault, not mine. I would do it again, if need were, though it does lead me into all this shame and trouble."（196）と述べるように、自ら正しいと信じた行為については世間からの非難にも耐える強さを持つ。それが Margaret を次の成長段階へと導く原動力になる。その強さはどこからくるのかと言えば、激しい感情や衝動性からの影響は無視できない。次の議論はこの感情が生み出す力の扱い方である。

Margaret の先達にあたる Gaskell のヒロインたちは、激しい感情を抑えるこ

とで行動を抑制し、ヴィクトリア朝のコードに合うように努めてきた。手放しで感情表現が許されるのは、母親もしくはその代理行為が示す愛情であろう。Mary Barton は物語の中で、恋人 Jem への愛を語ることはできなくても、父への愛は献身的な看護の形で表現することができる。Ruth は Bellingham への愛ゆえに非嫡出子を得たことに何ら恥も罪も感じなかったが、子供にその罪が及ぶと感じた時、自分の本音を殺しても母の役割に徹しようとする。さらに *Ruth* では、ヒロインと同じ性質を持つ Jemima Bradshaw までが、恋を叶えるために（つまり後に「良き」妻や母となるために）癇癪や衝動性を捨てて、"some humility"（370）を学ぶプロットに導かれる。Sally Shuttleworth や Jenny Uglow が指摘するように、ここで女性の激情はモンスターのごとく扱われ、退治するのが得策であるという言説が働くという点は見逃せない（Shuttleworth xxvii, Uglow 335)。また、*Wives and Daughters*（1866）で Roger Hamley が Molly Gibson に与える忠告、"One has always to try to think of others than of oneself"（152）のように、男性が女性に自己犠牲を美徳の一つとして勧めるやり方もそのバリエーションであろう。

ところが、Gaskell は Margaret の激情や衝動性については矯正する言説を用いてはいない。暴動の後、Gaskell は Frederick の事件で再び Margaret の衝動的な一面を引き出している。もし恥や怒りとして表出する Margaret の感情の発露を押さえ込めば、*North and South* は *Mary Barton* や *Ruth* と同じルートを辿ることになるだろう。それゆえ Frederick の事件は、Margaret の内なる激しさが消滅していないことを示す格好の例として挿入される。Harman は Frederick を Margaret の "alter ego" としてとらえ、Frederick の性格として描写される "the violence of the impulsive nature"（*NS* 247）を Margaret も共有している点を指摘しているが（Harman 370)、駅の場面はまさに、二人の衝動性が発動するのを目撃できる個所である。

Frederick は彼を追ってきた Leonards と格闘し、Margaret は力ずくで兄の腕を取って列車に乗せる。この場面の扱い方で興味深いのは、Frederick に突き倒された Leonards はその時の負傷がもとで死亡するが、傷害事件としての立件はされず、単なる事故として処理されてしまうことである。もちろん Margaret は Frederick のためにその場にいたことを否定するのだが、Thornton もまた

Margaretが裁判という公の場で嘘の証言をするような恥から守るため、治安判事の特権でこの事件をこれ以上追及しないように命じる。そしてFrederickは無事にスペインに戻り、警察からはさらなる追及もなく、Margaretは嘘をついたという事実すら不問に付される。Leonardsにとっては不公平なプロット処理だが、Margaretの物語には必要な場面である。軍事法廷から指名手配を受ける兄の逃亡を助けること自体、Margaretが国家の権威に反発している証拠である。その権威の手先がLeonardsであるなら、Margaretが彼の存在を切り捨てるのも当然であろう。さらに、Margaretの行為は自分のためでなく兄の救出のためであり、その後嘘をついたことで彼女は苦しむわけであるから、自己犠牲を払うという点においても、婉曲的ながらヴィクトリア朝のヒロインとしての面目は施している。

そこで、結末のShaw家の居間に戻ろう。ここでは唯一、Margaretが自分のために衝動性を垣間見せる瞬間がある。Thorntonが求婚の言葉と一緒に差し出したHelstoneの薔薇の花をMargaretが受け取る時、語り手はさりげなく"gentle violence"(436)とコメントをする。それはMargaretがThorntonの求婚に黙ってうなずいているだけではないことを示すものだ。彼女の衝動性は最後まで抑制されたり、馴化されたりはしない。これまで多くの批評家が*North and South*の結末について、安易な結婚プロットにおさまったという指摘を行ってきたが、Thorntonに再びの求婚のチャンスを与えるMargaretの成長は、決して伝統的なロマンスのヒロインのルートではない。Margaretの活動の場の拡大、そしてそれに耐え得るだけの内面の強さなど、一見「瓢箪から駒」式に持ち込まれる「ハッピー・エンディング」の背後には、非伝統的なヒロインの物語が存在し、Dorice Williams Elliottの言葉を借りるならそこには、"a mask that naturalizes what is *un*conventional in her [Gaskell's] vision of women's role"(47)が機能しているのである。

三つ目の要因であるMr. Bellの遺産は、Margaretの行動力を十分に発揮するためのチャンスである。遺産はMargaretをShaw家の居候の身から解放し、それにより彼女は自分の意思で行動する自由を得る。彼女が選んだ仕事は、ロンドンの貧民街へ慈善に出かけること。かつてHelstoneでもMargaretは貧者の訪問に出かけたが、それは牧師たる父の代理の行為であり、また牧師の娘の義務で

もあった。訪問相手を "her people" (17) と呼ぶ Margaret の言葉は、明らかに父の言葉 "my dear people" (36) のオウム返しであることがそれを証明する。だが、今度は訪問という形式は同じでも、Margaret の意識は全く異なっている。Higgins 父娘との交流を通して、Margaret は下層階級の人々とも友人の付き合いができるようになっていた。London の貧民街へ出かける Margaret は、誰かの代理でも仲介役でもない。後に Thornton と Higgins が "cash nexus" を超えた関係 ("some intercourse with the hands beyond the mere 'cash nexus' 431) によって結ばれるように、階級制度はそのままにして精神的なつながりを可能にしていくことが、Margaret の望むところであり、その実践のために、Margaret は Mr. Bell の遺産を有効利用する。

しかしながら、物語の当初、Margaret は商工業に従事する人々を嫌い、Thornton に対しても、"cash nexus" のみで労働者たちとの関わりをとらえる彼の態度を非難したものだが、その Margaret の成長の仕上げとして、お金を絡ませるプロットを持ち込んだのはなぜだろうか。そこには Gaskell のどんな計算が働いているのだろうか。

まず、"cash nexus" への嫌悪は、Gaskell と同時代に活躍した Thomas Carlyle の思想で、当時の文壇にも大きな影響を与え、Dickens を始めとする男性作家は Carlyle の理想に乗じる形でイングランドの近代社会を揶揄する作品を送り出した。[2] 文壇を占めるイデオロギーに従うなら Gaskell もその Carlyle の理想を作品に持ちこむのは自然の流れであろう。Margaret と Thornton の対立が、この "cash nexus" をめぐるものであるなら、Gaskell は時流に乗った物語として立ち上げたと言える。しかしながら、*North and South* は Carlyle の理想を途中まで好意的に扱うものの、後に反転させている。Margaret に暴君的な態度を責められた Thornton は、Higgins との交流を通して、労働者たちの福利厚生をも考慮に入れた経営方針に転じるが、今度は経済不況のあおりを受けて工場は経営難に陥る。Gaskell は、Carlyle の理想がその場の解決策としてはよいが、先の安泰まで保証するものではないという含みを持たせた上で取り込んだのだ。Milton で成功するには、工場主は弱者たる労働者たちを切り捨てても利益確保に従事するのが先決である、という事実は変わらない。"Cash nexus" は十分に機能しているわけである。しかしながら、この Thornton の失敗は後に

Margaret の資金提供と彼女との結婚を呼び込むためには不可欠の要素である。そのモチーフにあえて Carlyle を取り入れるのは、理想論だけでは現実は何も変わらないことを認識した上での措置である。

確かに、*North and South* 以前には、お金を媒介とした人間関係ではなく、仲間意識や共同体意識をベースにした人間関係の構築が、Gaskell の作品世界のバックボーンとなっていた。しかし、Gaskell はお金の価値を全く無視した理想郷を想像してきたわけではない。*Cranford* (1853) にしろ、"elegant economy" (42) という名目のもと、ご婦人方は互いに倹約に精を出しながらそれを見てみぬふりをするという、一種のゲームを楽しむような心の余裕を見せてくれる。だが、近隣の大都市 Drumble が経済破綻をすれば、田舎町 Cranford もたちまちそのあおりを受けることは承知である。Margaret がお金の価値を認めるのは、経済的な自立が彼女をさまざまな束縛から解放してくれるからである。両親を亡くし、兄が国外へ出奔している彼女にとって、Shaw 家の世話になる以外選択の道はない。Shaw 家での生活は金銭的に不自由はないものの、居候の窮屈さが Margaret を縛る。Margaret が不屈の精神を持つキャラクターとして描かれるのは、こうした環境に対応する彼女の忍耐力と適応力のためである。

最終的に Margaret の「活動の場」として用意された Thornton との結婚も、決して安定を基盤にした「ハッピー・エンディング」でなく、むしろ不安定な基盤の上に構築されるものである。お互いの合意に達したものの、Shaw 家からは "That man!"、Thornton 家からは "That woman!" と見なされる二人の前途は何一つ確定していない (436)。それは、Thornton が労働者たちとの関係について、"[my] utmost expectation only goes so far as this" (432) と述べるのと同じく、いつ均衡が破れるかわからない危険性を孕んでいる。結局、物語の始めに提示された形、つまり London、Helstone、Milton と Margaret が所属してきたコミュニティーはそれぞれの価値基準のもとで独立している、という状態は最後まで変わらない。その意味でも、Carlyle の理想が現状を打破して新しいものを呼び込めるのかという点に、Gaskell は疑問を投げかけるようだ。反 Carlyle 的な Margaret の行為による「ハッピー・エンディング」は、そうした Gaskell の意識の反映と言えるのではないか。

Ⅲ 結　　び

公的な領域と個人の領域をつなぐヒロイン Margaret の物語として見れば、*North And South* は一応の解決を見ることができる。しかしながら、本作品が *Mary Barton* と同じく産業小説の側面を持っているとして、その点から検証するなら、Margaret の物語は労働者階級の女性たちを全く切り捨てた格好になる。例えば、Bessy は工場の換気が不十分な環境のもとでの仕事が原因で肺を病んで亡くなるが、Bessy の病気とシンクロするように Mrs. Hale も病気にかかり、Margaret の意識はもっぱら母に向けられる。語り手は Margaret の意識の赴く時以外には Bessy のことには触れない。すなわち、Bessy の語る労働者階級の生活状況は、中流階級の女性の聞き手が存在して初めて言葉に乗せられるというわけだ。同様に、Mrs. Boucher に関しては、夫の自殺の後、家事一切を放棄して引きこもるため、Margaret は完全にお手上げ状態になり、隣人に彼女の世話を任せてしまう。すると、以後 Mrs. Boucher のことは Margaret の意識にのぼらないため、Mrs. Boucher の言葉は物語の中に現れては来ない。Hotz もこの点に注目し、Margaret が Mrs. Boucher を拒否する理由をこう述べる。

> ... Margaret seems significantly unsuccessful with Mrs. Boucher ... because of Margaret's necessary rejection of those who do not subscribe to the self-help philosophy — particularly as it applies in the working-class home — and the sense of reciprocity that her understanding of personal obligation demands. (176)

Hotz は、労働者階級の女性に中流階級の価値観を押し付けたところに Margaret の限界があるが、彼女の態度をそのまま受け入れるのもまた中流階級の価値観による解釈であると指摘する。これは、*Mary Barton* が労働者側に加担しすぎると批判されたことの裏返しであろう。Margaret が *North and South* において、個人と社会とをつなぐ役割を果たしたといっても、それは中流階級の女性の目から見た成功であって、労働者階級のヒロインをここに据えた時、Gaskell は彼女にどのような形で、社会の中での「活動の場」を与えることがで

きるのか。

しかしHoltzの指摘にはもう一つ見落とせない点が潜む。労働者階級の価値観である“the self-help philosophy”を否定したMrs. Boucherは、Mrs. HaleやFanny Thorntonのような中流階級の女性の姿に重ね合わせられる。つまり、象徴的に「眠っている」のだ。女性が公の領域に出て行くには、自らの道を切り開く意思とそれを支える資金が表裏一体となる必要がある。その点で、Margaretが“the self-help philosophy”を支持し、資本主義の価値基準であるお金の重要性を認めるようになったことは妥当な線であろう。

それでも、Margaretの行動が既存の社会経済の力であるお金の所有者を、男性から女性に移転させたに過ぎないという印象は拭えない。そうすると、女性の物語では新たに社会的モデルを作り出せないことになる。だが、当時の男性作家がこぞってCarlyle流にイングランドの近代社会の歪みを訴える中で、Gaskellは女性の「活動の場」を求めてその歪みを有効利用した。*North and South*が描くものは、*Mary Barton*のように新天地を求めての移住でもなく、また、*Cranford*のような女性中心のコミュニティーの形成でもない。既存の社会の中で、自己実現のための手段としていかに経済状況と折り合うのか、という点に基盤を置くことで、それが*North and South*のバックボーンとして機能していることは確かである。Gaskellの視点は、何かを新たに作り出すことよりも、「眠っている」何かを起こして活動させること、それを育てることにあると言える。

Notes

1. 女性作家が男性作家の文壇に参入することの困難さについて、Julia Swindellsは女性作家がペンネームを使用する必要性を切り口として述べている。例えばCharlotte Brontëは、女性が書いた作品だとわかれば評価に手加減が加わると考えて男性名のペンネームを用いた。Gaskellは未婚女性よりも既婚女性の方が作家として世間の風当たりが弱まるだろうと考えて、“Mrs. Gaskell”をペンネームに用いたという事例が紹介されている（101-113）。また、GaskellとDickensの衝突については、多くの批評家が作品との関わりで取り上げてきたが、Elsie B. Michieの指摘は、*Ruth*執筆時のGaskellが、個人的には公的な場と私的な場の分離を支持しながらも、それが自分の作家としてのアイデンティティを危うくすることにつながるという矛盾に悩んだ点に言及している（79-141）。
2. Thomas CarlyleについてはIan Campbellを参照した。また、Suzan Zlotnickによ

れば、男性作家の伝統は、近代化を否定すること、それに対して、Gaskell と Charlotte Brontë は古いものよりも新しいものにも向けたと指摘する（62-122)。

Works Cited

Campbell, Ian. "Mrs. Gaskell's *North and South* and the Art of the Possible." *Dickens Studies Annual* 8 (1980): 231-250.

Elliott, Dorice Williams. "The Female Visitor and the Marriage of Classes in Gaskell's *North and South*." *Nineteenth-Century Literature* 49 (1994): 21-49.

Gaskell, Elizabeth. *Cranford / Cousin Phillis*. Ed. Peter Keating. Harmondsworth: Penguin Books, 1986.

—. *Mary Barton*. Ed. Edgar Wright. Oxford: Oxford UP, 1998.

—. *North and South*. Ed. Angus Easson. Oxford: Oxford UP, 1998.

—. *Ruth*. Ed. Alan Shelston. Oxford: Oxford UP, 1989.

—. *Wives and Daughters*. Ed. Frank Glover Smith. Harmondsworth: Penguin Books, 1986.

Harman, Barbara Leah. "In Promiscuous Company: Female Public Appearance in Elizabeth Gaskell's *North and South*." *Victorian Studies* 31 (1988): 351-374.

Hotz, Mary Elizabeth. "'Taught by Death What Life Should Be': Elizabeth Gaskell's Representation of Death in *North and South*." *Studies in the Novel* 32 (2000): 165-184.

Ingham, Patricia. Introduction. *North and South*. By Elizabeth Gaskell. Harmondsworth: Penguin Books, 1995. vii-xxiii.

Michie, Elsie B. *Outside the Pale: Cultural Exclusion, Gender Difference, and the Victorian Woman Writer*. Ithaca: Cornell UP, 1993.

Shuttleworth, Sally. Introduction. *North and South*. By Elizabeth Gaskell. Ed. Angus Easson. Oxford: Oxford UP, 1998. ix-xxxiv.

Swindells, Julia. *Victorian Writing and Working Women*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1985.

Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.

Weiss, Barbara. "Elizabeth Gaskell: The Telling of Feminine Tales." *Studies in the Novel* 16 (1984): 274-287.

Zlotnick, Susan. *Women, Writing, and the Industrial Revolution*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1998.